「今日の説教、聴き手のために」　2008/10/26　明治学院教会(131)

（このプリントは毎週作っているものです）　岩井健作

「イエスの人格力」

マルコ福音書３章１節－１２節

１、マルコ福音書は激しい書物である。紀元７０年前後の成立。その頃すでに、「福音」は簡潔な「信条」に纏められていた。しかし、マルコは、それに抗して「神の子イエス・キリストの福音」(1:1) を、辺境ガリラヤ地方に伝わる「奇跡物語」「論争物語」「言葉伝承」などを集めて編集し独自の「福音書文学」の形式でイエスを物語表現した。形骸化する初期教会への過激な挑戦であった。

２、３章１－６節は、前節２章２３－２８の「安息日論争」を徹底化している話。「人間（自由の主体）が安息日（律法・規則）のためにあるのではない」。この言葉は「麦の穂を摘む」（社会扶助）ことで生命を支えられる貧しさの現実を知らない者が「律法（法、体制的秩序）」を楯に、人（他人）の命を奪うことに荷担していることに投げ掛けられた、その状況で力をもつイエスの言葉であった。状況と言葉が組合わさった伝承を新約聖書学では「アポフテグマ」（聖者の逸話を彼らの言葉に中心を置いて描く、一つの文学類型を特徴づける呼称）という。言葉のみの伝承が普遍化、観念化するのを避けた伝承である。イエスや弟子たちの行動が誘因となって起きたユダヤ教の指導者との論争での言葉である。

３、４節。安息日医療には緊急助命の例外規定があった。パリサイ派でも「生命を救うこと」の方が安息日の戒めより優先すると考えていた。「手の萎えた人」は、生命の危険が無いから、当然翌日に回されるケース。イエスの革新性は慢性的障害者をその日に癒した。緊急規定を一般化し、徹底化した。安息日であろうと、何であろうと、善をなすことは常に妥当する要請である。中立の逃げ場がない思想、中立の逃げ場を廃する思想が表明されている。自分にできるはずの行動や闘いをしていない者は『生命を殺す者』の側なのである。

４、５節。「黙っている」。身の保全を図る在り方。イエスは怒る（旧約では怒りは神の怒り（裁き）を表し、新約聖書では怒りは否定的に用いられている）。

５、６節。マルコの主張。イエスは社会秩序を揺るがす危険分子として処刑されるに至る。「神の子イエスキリストの福音」は「受難と死を生きる人イエス」を予想する。

６、マルコ３章１－６を何度も何度も読見返して見て、そも激しさに圧倒される。イエスの激しさ、それを収録するマルコの激しさ、そして、それを読み続けてきた歴史の中の「激しい」人々。その系譜につながる部分が私たちの内にあるなら、それを大切にしたい。それは「神の賜物」である。「黙って」逃げを決め込んでいる部分があるならば、そこはイエスの「怒り」を受け取っていきたい。「片手のなえた人がいた」とある、現在もいる。この現実の苦悩には心を閉ざしてはならない。福音は「神の裁きと赦し」である。裁きを自覚しつつ、なお、イエスに従ってゆきたい。心貧しいものにも招きが与えられている。現実の苦悩は、いつも私自身を決断を迫る。イエスの人格力に打たれて生きる生活を祈り求めてゆきたい。

７、『教育力』（岩波新書）の著者斉藤孝氏は、「あこがれにあこがれる関係づくり」が教育力だと言う。イエスは「命を救うことか、殺すことか」を日常の問題として突き付けた。命への関係づくりはイエスの人格力の威力である。